

アブストラクト：

デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進による企業データの利活用の必要性が叫ばれて久しい。DXの成果の一つとして、従来では収集されていなかった様々なデジタルデータを保存しダッシュボードなどの形式で統計グラフとして可視化することで、ビジネス指標の変化を日常的に共有することができる環境の構築がある。その利活用のためには統計学やデータサイエンスの知識・スキルに加えて、データからビジネス環境や市場の動向等の現実世界の文脈を読み解く力が必要であることが経験則として語られている。しかしながら、グラフ読み取りタスクは現実世界の文脈を持たない数学グラフの読み取りと同質でその延長上の認知過程を経るのか、それとも認知過程自体が異質に変化するのかは実証的には明らかになっていない。その違いを知ることは、統計グラフを用いたより良いデータ活用のための基盤的な知見となる可能性がある。本講演では、数学グラフと統計グラフの読み取り時の認知過程に関するMRI装置を用いた脳血流量計測実験の結果について紹介する。また、データサイエンスに親しい研究者や学生を対象として脳血流量計測実験における統計的有意差の検出の方法や関連する話題を提供する。